

令和2年秋の外国人叙勲 台湾人受賞者（3名）に対する勲章伝達式の実施について

令和2年11月3日、日本政府は令和2年秋の外国人叙勲受賞者を発表し、台湾からは、謝牧謙・輔仁大学跨文化研究所兼任教授、台湾大学・中国文化大学日本研究センター諮問委員が旭日中綬章、劉耀祖・池上一郎博士文庫研究学会理事長が旭日双光章、丘如華・社団法人台湾歴史資源経理学会秘書長が旭日単光章を受章されました。

これに伴い、令和3年1月16日に加藤英次・当協会高雄事務所長より劉耀祖氏に対し、また1月27日、28日に泉裕泰・当協会台北事務所代表より謝牧謙氏・丘如華氏に対して、それぞれ勲章が伝達されました。

【謝牧謙氏】

勲 等：旭日中綬章

主要経歴：輔仁大学跨文化研究所兼任教授、台湾大学・中国文化大学日本研究センター諮問委員

受章理由：原子力分野における日本・台湾間の学界・産業界の交流深化及び相互理解の促進に寄与

主な功績：

- ・日台の第一線で活躍する「産官学」の技術者が隔年で一堂に会す「中日工程技術研究会」において40年以上、日台の専門家による「原子力安全セミナー」において30年以上中心的役割を担い、原子力分野における日台間の交流の礎を築く。
- ・日本の大学と台湾の医療機関との間の緊急放射線被ばく医療分野における協力関係構築に寄与。
- ・台湾における福島原子力事故研究の第一人者として、福島復興の現状や放射線の本質に関する正しい理解の浸透に努め、情報発信に尽力。



泉代表より勲記伝達



謝牧謙氏による謝辞

【劉耀祖氏】

勲 等：旭日双光章

主要経歴：池上一郎博士文庫研究学会理事長

受章理由：台湾における対日理解の促進及び友好
親善に寄与

主な功績：

- ・歴史的建築物である池上文庫の管理・運営、同文庫を活用した日台交流関連事業、屏東県の大学・高等学校に対する日本語学習支援、台湾における邦人子女に対する支援に長年寄与。



加藤所長より勲記伝達



劉耀祖氏による謝辞

【丘如華氏】

勲 等：旭日単光章

主要経歴：社団法人台湾歴史資源経理学会秘書長

受章理由：台湾における対日理解の促進及び友好

親善に寄与

主な功績：

- ・台湾各地にある日本統治時代の史跡保存及び活用に尽力。住民、民間団体、行政機関と幅広く連携し、保存された歴史的資産を通して、台湾における日本の歴史・文化に対する理解の促進に貢献。
- ・台湾各地の住民、研究者、行政関係者とともに訪日し、日本の歴史資源の保存に関する経験やプロセスに対する理解を深めさせる等日台双方の各階層の交流をつなぐパイプ役として大きな役割を担う。
- ・地方創生に関わる日台間の交流・友好関係を促進。



泉代表より勲記伝達



丘如華氏による謝辞

受章所感～恩を忘れず、報いは求めず

輔仁大学跨文化研究所兼任教授
台湾大学・中国文化大学日本研究センター諮問委員
謝牧謙氏

この度は、令和2年秋の叙勲「旭日中綬章」の賞を賜り、身に余る光栄です。これも、ひとえに皆様方のご指導とご鞭撻の賜と深く感謝いたしております。受賞の理由は「原子力分野における日本、台湾間の学会、産業界の交流深化及び相互理解の促進に寄与」です。

過去を顧みますと、1962年4月は私の人生の初船出であり、日本向けバナナ輸出専用船「僑果輪」で神戸に降り立ち、日本の土を初めて踏み、甚く感激しました。翌日仙台に向い、十年に及ぶ東北大学の学究生活がスタートしました。在学中は、ロータリ米山奨学金のお陰で、順調に学業を修めることが出来ました。今は亡き恩師である岡部泰二郎先生の教学理念、即ち、孔子の啓発教育「子曰：不憤不啓、不悱不発、挙一隅、不以三隅反、則不復也」^(注1)は、私の思考に大きな影響を与えました。

1971年に帰国、核能研究所に奉職し、原子力研究に従事しながら、中正理工学院、成功大学、清華大学、中原理工大学などで教鞭をとり、同時に、日台間の原子力交流につとめ、ほぼ毎年、日本の「原子力産業年次大会」に参加したほか、「日台原子力安全会議」「中日工程技術研究会」の企画に携わり、原子力分野の人脈を築き上げました。2002年に核能研をリタイヤしましたが、その後も核能科技協進会の執行長を務め、日台間の交流を継続しながら、台湾大学、輔仁大学、政治大学で教職を兼務しました。この間、交流の成果が認められ、中華核能学会最高の賞となる「朱寶熙記念賞」、日本機械学会の「功績賞」など、数々の賞を受賞する事ができました。

2011年中華民国建国百周年を迎え、原子力界の記念行事として「台日原子力交流回顧と展望」特集を編集しました。2017年台湾大学在職時、石門 環氏と「福島事故後、台日エネルギー政策の変換と原子力協力」を共著。また台日両国の原子力分野の交流に尽力し、双方の原子力発電所の運転管理及び安全運転の向上に役立ち、特に台湾の原子力安全技術のレベルアップに貢献したと自負しています。311事故後も交流を推し進め、日本の原子力安全性の理解促進と風評被害の払拭に努め、さらに廃炉措置と廃棄物処分など台日共通の問題について、今後も積極的に対応していきたいと考えています。

私が台日交流に永年尽くした理念は「先駆者の道筋を辿り、今後のあるべき姿を描き、未来を開拓する」事であります。また仙台で過ごした10年間に自然の美と人間の叡智に接し得たことは、私にとってまことに幸いでした。リタイヤ後の第二の人生は奉仕の人生を送り、「恩を忘れず、報いは求めず」のモットーを堅持し、築いた友情の絆を大切に、今後とも日台友好の懸け橋として微力を尽く所存です。一層のご理解とご支援をお願い申し上げます。

この受賞にあたり、多大なご支援を頂いた泉裕泰代表、日本台湾交流協会の皆様に感謝いたします。また今は亡くなられた下記の諸先生方にご協力ご指導を賜り、深く敬意と謝意を表します。

東京大学名誉教授 三島良績

原子力産業会議副理事長 森一久

国際原子力機関 IAEA-ISOE 元議長 水町 渉
衆議院議員 後藤 茂

注1:「憤せざれば啓せず、悱せざれば発せず、一隅を挙げて、三隅を以て反さざれば、則ち復せざるなり」。即ち「一隅を教え、自ら三隅を研究するようではなくては、二度と繰り返し教える必要はない」という孔子の啓発教育の精神。

旭日双光章受章に寄せて

池上一郎博士文庫研究学会理事長 劉耀祖氏

2021年1月16日、晴れ。この日は池上一郎博士文庫創立20周年と叙勲というめでたい日でありました。この旭日の二光が日台を照らし、友好、平和、繁栄をもたらすものと心強く念じています。

では叙勲の原点となる池上一郎博士文庫とは何か。それは池上一郎先生を記念して設立した「亜細亜最南端の日文図書館」です。竹田郷は屏東平野に位置する小さな村で、屏東市から普通列車で30分かかります。竹田郷周辺は檳榔やバナナの畑が広がり、大王椰子が繁茂するのどかな熱帯農村地帯です。日本風の木造駅舎も100年の歳月を迎えました。

池上先生は1911年1月16日東京生まれ。東京府立一中、第一高等学校、東京帝国大学医学部を卒業しました。戦中、軍医に召集され、少佐任官の広島勤務が決定。新妻と一緒に転任地に赴きましたが、前任者の居残り運動により、先生は南方派遣が決まり、借りた新居を返すことになりました。そして、輸送船団に乗ってたどり着いたのは屏東の竹田郷です。竹田郷の第一九七一三部隊の野戦病院長として渡台しました。部隊の主任務は防疫給水で、救急車や大型手術設備はないものの、ただちに内外科医を13人組織して、文民に懇切な医療を施しました。医薬品、医療機材の乏しい中、マラリアにはキニーネやアテブリンを用いました。竹田郷も大空襲に遭い、6名の死者と少なからず負傷者が出ましたが、全てこの病院で対応しました。今の「国境なき医師団」に勝るとも劣らない医師です。医療は終戦・引揚げまで続けました。

引揚げ後、池上先生は東京で開業医となりました。私が最後に訪問した時、文庫設立の話をした

ら「設立には賛成ですが、私は当たり前のことを当たり前にやったにすぎないから、名前は出さなくて良い」というご意見でしたが、私は「先生の当たり前は普通の当たり前ではないから」といって納得していただき、池上先生90歳の誕生日、2001年1月16日に文庫が設立され、今年で20周年を迎えます。池上先生は設立された文庫の映像をご覧になり、相当満足な声をあげられたとのこと。その3ヶ月後にご他界し、私と頼耀熙・竹田郷郷長（当時）が東京まで焼香に参りました。

文庫運営にあたっては、20年間、最大の力を出してくださった館長の曾貴珍女士、並びに日台双方のボランティアたち、設立当初の頼郷長、日本台湾交流協会には、喜田修所長から加藤英次所長まで、歴代所長にはお世話になりました。感謝の至りです。

目下、文庫の蔵書は2万冊弱、永久保存書として①絶版書②アルピニストの野口健さんが署名して贈ってくださった書籍③蘇啟誠・台北駐日経済文化代表処那覇分處處長（当時）が台北駐大阪経済文化弁事處處長に栄転する際、贈ってくださった蔵書があります。蘇処長が大阪で台風被害のデマのバッシングによりご自害されたことは残念なことでありました。

文庫は10年前、台湾省政府から私立4大優良文庫として台中の省政府賞が贈与されるということでしたが、自分達にはその資格はないとして公文書で断りました。

このたびの叙勲にあたって、各方面から祝電や祝報を受け取りました。台湾の外交部長、日本の衆参両院議員たち、そして東京西ロータリークラブ米山奨学会などたくさんの方々から祝電をもらいました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

文庫にはこれまで、日本の修学旅行生や僧侶の団体、一般の観光団体なども訪問しており、皆様、戦前の話を聞いて喜んでお帰りになります。コロ

ナが収束したら、また再開できるでしょう。

余談になりますが、文庫前には日本屏東会の看板があります。これは昔、屏東にいた日本人が帰国して組織した会です。戦時中、卒業式ができなかったことから、私は親戚の劉校長に卒業式をやらせようとして提案して、実現しました。学生が祝辞を読み、東京大学医学部教授が答辞を読み、「蛍の光」と「仰げば尊し」を歌って、みな涙しました。卒業式参加証明書をもって家宝にしたとの話が地方新聞でも報じられました。私は彼らに食事の招待とTシャツと看板を作って差し上げました。

文庫に関わりのある人は、人生の最後に文庫を訪れます。文庫は非常に不思議な場所で、数年前にボランティアの会計が辞めると言って、辞めた後数週間で亡くなりました。もう1人は理事を辞めると言って、やはり辞めた後1週間で亡くなりました。文庫の理事と幹事は法的にも財的にも義務はありませんので、最近では亡くなるまで名前を置き、文庫は長寿のシンボルにもなっています。最近では93歳と96歳の理事が亡くなりました。

いろいろな思い出がありますが、これからももっと有意義なことをやっていきたいです。コロナが収束したら、文庫の中にある零戦を台南の飛虎將軍廟に贈呈するセレモニーをやりたいと思っています。これからも日台の交流を深めていきたいと思っています。訪問するお客様は、池上文庫か日本の住安克人・理事にご連絡ください。

旭日単光章を受賞して

社団法人台湾歴史資源経理学会秘書長

丘如華氏

1986年、言論の自由や集会デモが制限されていた時代に、「楽山文教基金会」が成立しました。私が執行長に就任して間もなく、すなわち戒厳令

が解除された一ヶ月後に「我愛迪化街」保存運動を展開し、文化資産保存とふるさと保全教育に注目した、台湾で数少ないNGO組織となりました。当時まだ民間に開かれていない社会的気風の中、公衆に関わるテーマに積極的に参画してきました。この社会運動の過程において、実は私もどのように進めていくべきなのか迷い、長年にわたって国際的な学習と協力を積極的に求め続けました。その結果、1991年にはマレーシアのペナンで開催された国際連合地域開発センター(UNCRD)のシンポジウムに参加し、西村幸夫教授と知り合いました。西村教授は、地域住民主導で町並み保存に取り組む「全国町並み保存連盟」を紹介してくださり、1992年には、私は九州吉井町(※現・福岡県うきは市)で開催された第15回町並み大会に参加しました。これも私と日本各地域との長年にわたる友好のきっかけになりました。

私は大会開催中、日本の民間が自発的に取り組んできた保存の経験を多く学び、日本の町並み保存のキーパーソンとも出会うことができました。第15回大会以降30年近くにわたり、ほぼ毎年台湾の行政機関、地方の文化関係者、教授、研究者に呼びかけ、一緒に町並み大会に参加すると同時に、台湾の経験を日本の仲間たちと分かち合うことにも尽力してきました。唯一残念だったのは、台湾では文化や法源の違いにより、町並み保存と都市計画を結びつけて、町並み保存を推進することができなかったことでした。

2000年には日本台湾交流協会の日台歴史研究者交流事業により訪日し、《空間と地方発展の結合》に関する研究を行いました。日本の辺境にある集落を訪れ、フィールドワークや、現地住民とのコミュニケーションにより、どのように文化資産の保存・再生を推進するかについて学び、さらに、松居秀子氏や東京大学の教員学生とともに軻の浦の文化保存運動にも参加しました。

2004年6月には、文化保存に関心を持つ多くの仲間たちとともに、「台湾歴史資源経理学会」を設立しました。引き続き台湾の歴史文化と環境に注目しながら、今日まで国際的な取組みへの参加や多方面の関係構築を通じて、歴史資源や空間環境の永続的な運用管理の促進に取り組んできました。長年にわたる日本の地方との交流を通して、文化保存と地域再建に関する経験についても学びました。小林郁雄先生、八木雅夫先生が台湾の921大地震被災後の空間・文化復興を支援したことにより、楽山文教基金会は学者や立法委員等を結集し、「921文化資産重建行動連盟」を結成し、「集集駅」を保存しました。さらに、「文化立法連盟」等に所属する立法委員が団結し、「文化資産法」の改正を推進しました。その後、スマトラ沖大地震や東日本大震災後には、台湾歴史資源経理学会も各地の文化資産の被災後の影響に注目し続け、関係団体と協力して行動計画を遂行してきました。

2012年、再び日本台湾交流協会のフェローシップ事業の支援を受け、地域活性化・資源再生、芸術で空間を作り替えていく事例や手法を理解するために、《歴史、文化、環境が共存する大型文化イベント－「越後妻有大地芸術祭」と「瀬戸内国際芸術祭」を例として》をテーマについて研究しました。北川富朗氏や福武総一郎氏と知り合い、芸術祭の背後にある中心的な考え方を学ぶことができました。2013年からは総監督者として台湾の芸術チームを連れて、「福武ハウス－アジア・アート・プラットフォーム」に参加しました。2014年には小豆島福田地区で長年遊休資産となっていた旧郵便局を、地域住民が1960年代の記憶を呼び戻すコミュニティー文化センターとして蘇らせ、リフォーム後の郵便局は「きょく」または「台湾館」と呼ばれるようになりました。

2014年以降、毎年青年有志で結成された「小牛隊」とともに、少子高齢化が進む瀬戸内海の地

域をアートで装飾し、地元のお祭りを一緒に開催する等を通して、現地との絆が生まれ、間接的に現地共同体の団結力が引き出されました。また、越後妻有大地芸術祭、瀬戸内国際芸術祭に重ねて招待いただき、開幕式で台湾の経験をシェアしました。日本台湾交流協会が研究機会を提供して下さったことにより、日台の深い交流のきっかけが生み出され、台湾各地方の芸術祭開催の可能性が示されました。

長年にわたり、日本の仲間たちを台湾に招き、日本の地方や学界との交流経験を講演していただいたり、日台双方の共同研究をマッチングさせたり、日台社区協定・友好関係の成立を助けたり等、さまざまな分野・方法によって取り組んできました。日本台湾交流協会の長きにわたる御支援、並びに全国町並み保存連盟と76の団体会員との親密な交流が民間の力の重要性を私に教えて下さったことに感謝しています。北海道から沖縄県竹富島までの多くの仲間も、文化資産保存の困難な道程において、私に力を与え、私の人生を豊かなものとしてくださりました。

2017年には全国町並み保存連盟から峯山富美賞を受章し、2020年秋には日本政府より「旭日単光章」が授与され、一人の楽観主義者として、日台双方の地方交流と友好関係が引き続き広がっていくことを信じ、この榮譽に感謝申し上げます。この榮譽は、長年私と関わって下さった日本及び台湾のパートナーたちのものでもあります。ありがとうございました。

(丘如華氏コメント原文は中国語。台北事務所にて日本語訳。)